

芳村俊一が築いた  
やきもの体系

その思考と実践

没後10周年

2016年5月18日

陶 研 究 会

## 芳村先生の略歴

- 1924年（大正13年） 徳島市生まれ
- 徳島中学校卒業
- 鳥取農林専門学校・農科（現鳥取大学）に入学（父親が鳥取松江の裁判所勤務のため）
- 3年の時軍隊に入る。 満洲・ソ連国境警備兵
- 戦後、学校に戻ってから、食糧問題等でストライキをやり、学校を去る
- 鳥取県立境高校の教員を振り出しに公立学校教員39年間。主として美術を教える
- 1954年（昭和29年） この頃、高橋楽斎の茶碗を見てやきものに惚れ込む
- 1965年（昭和40年） 陶芸グループ「へんど」を結成
- 1984年（昭和59年） 定年退職
- 伊豆の湯ヶ島に「芳村やきもの資料館」設立
- 2005年（平成17年） 6月 逝去

## 芳村先生の築いたやきもの体系

芳村先生の焼き物づくりに対する考え方は、従来の常識から突き抜けている。それまでは（今でも？）良い土、良い釉、良い窯づくりが常識だった。先生は良い土だけをよしとしない。路傍の土でもそれは特有の良さを持つとして、身近な土も焼き物の胎、釉、窯材として使ってみせた。日本の国状と焼き物の将来を考えて、日本全国の土や石を調べ実際にテストして、焼き物にするとどうなるかを展開してみせた。釉も胎と同じく、どんな土や石でも溶ければ釉になるとした。いずれの場合も、その化学成分が珪石を主体としたアルミナやアルカリから成る物質であることの考えからである。窯は、焼く土と同じにすると良い焼き物がつくれるという考えで、自宅の横にそのやり方で穴窯を造って焼成してみせた。先生にとって、胎、釉、窯は違った温度域で夫々の役目を果たすという考えである。即ち、使う土がある温度で釉となる場合、それより下では、胎や窯の材料として使うことができるというのである。現状では、1250℃程度の焼成が幅を利かし、市販の釉もそれに合わせて調合されているケースが多い。多くの人達は、焼き物とは1250℃程度で焼くものという固定観念を持ってしまう。先生が土を焼くということは、その土の特性を生かすことのできる温度で焼いてやることである。土を主人公にせよということである。1250℃程度で焼ける土だけに注目しないことである。どんな土や石でも焼き物の対象とし、その土に合った温度で焼いて胎や釉にするということで、身近な土や石も取り込まれる。日本全国を行脚して集めた6万種に及ぶ土や石を実際に焼成テストして、その結果と歴史的な地質背景を示してくれました。それは、時には日本と大陸との違いにまで拡がって論じられた。幾つかの土や石を焼き物に使う人はいるが、日本全国や海外にまでその地質的展開をしてみせたり、考えたりする人はないと思う。今までの焼き物の考え方に孔を開けた人であった。先生が時折「僕は学者じゃないから、デタラメもいうよ」といわれた。これは今思うと“自分で考えなさい”という意味であったと思う。自主陶芸の薦めであり、終生先生が広めたいテーマであった。

雑誌“つくる陶磁郎”の編集長、入澤美時が先生を追悼する文の中で“芳村さんは自由

な発想の持ち主だった”と述べているが、このことが先生の下に多くの人が集まる理由であったと思う。一つの考え方に固執することなく、のびのびと各自のやり方で活動することができた。

焼き物に使う土は、可塑性が絶対条件という考えに先生は縛られない。溶岩単味の粉末に水を加えて塊とし、彫刻して形をつくり焼いてしまう。通常の素焼きでは形が崩れるので、それより高い焼結が始まる温度まで上げて焼成する。このように可塑性のない土までも胎としてしまう姿勢は、いままでの固定観念を覆すとても新鮮な考え方に思えた。ロクロが挽けなければとか、収縮率が大きすぎるとか、耐火度がないからとかを欠点と捉えるのではなく、土や石の持つ特性と解釈する。多くの土や石は珪酸化合物であると言われただけでは、焼き物に使えるとはなかなか思えない。実際に焼いて見せられると納得できるものである。

焼き物の材料屋から買うのではなく、身近な土や石を使って焼き物が楽しめることを多くの人達に知らしめたことは、目から鱗で“土と石のやきもの大革命”といえる。

今までも各地の窯場で、そこで採れる土に合った温度で焼成されてはいるが、地球上の殆どの土や石がやきももとして使えると知らしめたということは、次に示す自己革命より大きな出来事といえる。特に、陶業地でもない所のなんでもない土や石が、焼き物の胎や釉に立派に使えると提唱したことは一大事件といえる。

このような素材の美を重要視した焼き物づくりが、市販の素材をもとにしたそれと共に考えられる。どちらも焼き物づくりである。

先生は、1992年に焼き戻しと名付け、透明釉を使った土特有の焼成温度での発色（自然彩と呼称し主に1200℃以下の低温焼成による）を発見し自己革命であると記している。この自己革命以後については、2010年に陶研究会の学習会用に書かれた宮澤氏の冊子に詳しい。

1992年（68才）から、亡くなるまでの13年間は土からの発色を“自然彩”と名づけてテストしてその結果を5年後の1997年に「やきもの実験・静岡の土」として出版している。

1960年に陶芸グループ「へんど」を結成した先生は、1980年からそれまで蓄積してきた資料と更なる学習によって、単行本「土と石から見たやきもの」を手始めに、7冊の本（内1冊は私家本）の発行を成し遂げた。

陶芸の関連誌へ焼き物の考え方や実際のやり方を発表していった。

1970年代のはじめから起こった陶芸ブームと1980年代から、相次いで創刊された陶芸の雑誌「陶芸四季、1979-」、「月刊 陶、1980-」、「炎芸術、1983-」、「陶磁郎、1995-」、「陶工房、1996-」、「つくる陶磁郎、1997-」、「陶遊、2000-」がブームに火を点けた。「陶芸四季」は1984年(?)に廃刊となった。「陶磁郎」、「つくる陶磁郎」、「陶遊」の3誌に先生の記事が掲載され、多くの人達に焼き物は身近な土や石を使ってできることを知らしめた。

1995年の「陶磁郎」の発刊で、編集長の入澤美時\*と同世代の陶芸家である吉田明\*が意気投合して陶芸ブームは広く興味深い方法で一般層まで浸透していった。

彼らより20年ほど先輩にあたる先生は、彼らへも焼き物の根源的な考え方の点で多大の影響を与え、3人は親しく交流することとなり、机上の焼き物論が多い中から実践的で身近な焼き物の方法が誌上を賑わして多くの支持を得た。

2005年に先生が亡くなり、2008年と2009年に吉田明と入澤美時が次々と亡くなって、3人による焼き物の新しい風は鎮静化した。

先生の考え方と3人の交流については、吉田と入澤が雑誌「陶磁郎」（2006年、45号）に掲載した追悼文からよくわかる。編集者の立場から入澤美時と、製作者の立場から吉田明が書いている。

入澤美時は、先生が生存中にもその思想について、先生と対談して、“芳村のやっていることはやきもの以前”だと書いている（小説推理、2000年4月号）。先生は、確かに“やきもの以前”について書いたり、話してはいたがそれに終わらなかった。

2人のものと異なり、1989年春号（マリア書房 1989年3月26日発行）に掲載の堀慎吉\*のものは、追悼文ではないが、中野サンプラザでの展示を見て、現状の焼き物に懐疑的だった美大出の著者が、自らも身近な土を焼いていて共鳴した評論が16頁に亘って載っていて興味深い。1992年の自己革命以前の先生の焼き物についてです。

先生の考え方と実践したことの焼き物的意義が、彼らの文章から浮き上がってくる。

先生のやきものへの想いをいかに継承していくかが我々に与えられた課題であります。

- \* 入澤美時 : 陶磁郎、つくる陶磁郎の編集長（1947－2009）
- \* 吉田明 : 陶芸家（1948－2008）
- \* 堀慎吉 : 「土」をテーマとする制作の発表,他（1936－2003）

## 芳村先生の年譜

- 1924年 (大正13年) 徳島県 徳島市に生まれる
- 1953年 29才 この頃見た高橋楽斎の茶碗を見て惚れ込む
- 1965年 41才 陶芸グループ「へんど」を結成
- 1980年 56才 単行本「土と石から見たやきもの」(株)光芸出版
- 1980年 56才 展示会解説を兼ねた本「やきもの(土と石)その1草稿
- 1980年 56才 月刊 「陶」に“土と石の研究”連載を始める
- 1981年 57才 「日本やきもの集成」 平凡社 共著
- 1982年 58才 単行本「釉から見たやきもの」(株)光芸出版
- 1984年 60才 定年退職
- 1986年 62才 伊豆の湯ヶ島に“芳村やきもの資料館”設立
- 1988年 64才 単行本「陶土の探求」(株)光芸出版
- 1992年 68才 “自然彩”と名付けた焼成法の発見  
標識鉄柱に激突し頸椎脱臼と肋骨にヒビが入る
- 1994年 70才 窯づくり実践報告会発表要項(於 中野サンプラザ)  
(へんど陶芸展兼私の窯づくり、私の窯焚き)
- 1996年 72才 雑誌「陶磁郎」 6号  
“窯づくりはダレでもできる”
- 1997年 73才 単行本「やきものをつくる ダレでもできる自主陶芸」  
(株)双葉社
- 1997年 73才 単行本「やきもの実験 静岡の土」 静岡新聞社
- 1998年 74才 雑誌「つくる陶磁郎」 2号  
窯焚きのすすめ 行って来い窯づくり
- 1998年 74才 雑誌「つくる陶磁郎」 5号  
野焼き 自分のアイデアを生かす
- 1999年 75才 雑誌「つくる陶磁郎」 6号  
土を知る 日本の土を焼く
- 1999年 75才 季刊 ストーンテリア Vol 50  
技術考 石を使ったやきもの
- 2000年 76才 雑誌「陶磁郎」 23号  
“にっぽんの土採りにでかけよう”
- 2000年 76才 雑誌「つくる陶磁郎」 13号  
土を焼いた美しさ

- 2000年 76才 雑誌「陶遊」 連載を始める
  - 1号：“やきもの事始め なんでも焼くことから始めよう”
  - 2号：“土と焼きのはなし” ①  
土や石は火に強く、土は石より火に強い
  - 3号：“土と焼きのはなし” ② 土談義
  - 4号：“土と焼きのはなし” ③ 首都圏の土（1）
  - 5号：“土と焼きのはなし” ④ 首都圏の土（2）
  - 6号：“土と焼きのはなし” ⑤ 首都圏の土（3）  
火山灰の系譜
  - 7号：“土と焼きのはなし” ⑥ 首都圏の土（4）  
南多摩での土しらべ
  - 8号：“土と焼きのはなし” ⑦ 焼き 火と人間
  - 9号：“土と焼きのはなし” ⑧ 焼き 焼く施設 自然の窯  
古い窯
  - 10号：“土と焼きのはなし” ⑨ 窯づくりをしよう ①
  - 11号：“土と焼きのはなし” ⑩ 窯づくりをしよう ②
  - 12号：“土と焼きのはなし” ⑪ 窯で遊ぼう
- 2001年 77才
  - 13号：“土と焼きのはなし” ⑫ 焼く 焼くということ
  - 14号：“土と焼きのはなし” ⑬ 焼き 焼きへの遍路①
  - 15号：“土と焼きのはなし” ⑭ 焼き 焼きへの遍路②  
石から学ぶ
  - 16号：“土と焼きのはなし” ⑮ 焼き、焼きへの遍路 ③  
子供に教えられて
- 2001年 77才 単行本「やきものをつくる 日本全国身近な土を焼く」  
(株) 双葉社
- 2001年 77才 秘土巡礼 INAX 出版  
芳村俊一のやきもの革命  
土を焼くとは、土そのものの美しさを引き出すこと
- 2003年 79才 単行本「作陶考」 私家本
- 2004年 80才 へんど会作品集の刊行
- 2005年 81才 逝去  
陶芸グループ「へんど」解散

\* 先生の主宰した陶芸グループ「へんど」は、その活動期間40年間に39回の陶芸展を東京と静岡で行った。